

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月15日現在

機関番号：12606

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22320034

研究課題名（和文） 東京音楽学校・東京美術学校の受託作に見る近代日本の芸術教育

研究課題名（英文） Art Education as Examined through Musical Compositions and Art Works Commissioned to The Tokyo Academies of Music and of Fine Arts between 1890 and 1949

研究代表者

橋本 久美子 (HASHIMOTO KUMIKO)

東京芸術大学・総合芸術アーカイブセンター・特任助教

研究者番号：70401495

研究成果の概要（和文）：東京音楽学校と東京美術学校が明治から昭和戦後まで文部省、皇室、陸海軍、企業、財閥、学校、市町村からの依頼により行った受託作には、全国各地の校歌・各種団体歌、皇居前の楠木正成銅像や上野公園の西郷隆盛銅像等がある。音楽と美術双方で学内文書調査、現地調査、現物撮影、現状調査、原資料のデータ化等を行った結果、両校の受託作は近代的共同体のイメージを感覚面から共有させ、近代国家形成の一翼を担った点では共通するが、受託の方法、規模、意義、受託作が社会に及ぼす影響や浸透の仕方は相異なることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：The school hymns and other official songs composed by those affiliated with the Tokyo Academy of Music, as well as statues/memorials now famous as tourist spots (such as the statues of Masashige Kusunoki and Takamori Saigo) are instances that illustrate works commissioned by the government, Imperial House, plutocracy, etc. to the Tokyo Academies of Music and of Fine Arts in the Meiji and Showa eras. These commissions reflect the Academies' relations to the government as well as the society of modern Japan and thus provide us with keys to reading the social, cultural, and political trajectories of modern Japan. The examination and investigation we conducted on internal documents and the actual works commissioned, etc. as well as our interviews with commissioners, have revealed that, while commissions in both fields equally indicate their close proximity to policies on general education in the arts and the modernization of the state, they each were conducted on different intentions and scopes, thus resulting in different impacts on the society.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
2011年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2012年度	1,900,000	570,000	2,470,000
年度			
年度			
総計	7,200,000	2,160,000	9,360,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：芸術・文化政策、日本近代芸術（音楽・美術）史、芸術（音楽・美術）教育、東京音楽学校、東京美術学校

1. 研究開始当初の背景

(1) 東京音楽学校の依嘱作曲の記録は、明治 40 年の滋賀県立商業学校（現・滋賀県立八幡商業高等学校）校歌に始まり、戦後も新制大学発足後の昭和 32 年度まで続く。昭和 24 年 4 月までの東京音楽学校時代の依嘱作曲は文書綴 14 冊に保管され、その概要は『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇第二巻』（2003）に一覧表として公開された。曲は校歌を中心に市歌、社歌、奉迎歌、部隊歌、地方自治体の団体歌など多様だが、曲の種類も歌詞も近代国家が音楽に求めたものを如実に伝えている。依嘱作曲の歴史は、近代共同体形成と音楽との関わりを示すと同時に、同校が近代国家形成の一翼を担う期待に応えながら歩んだ歴史でもあった。

依嘱の各綴の内容ごとに数えた合計件数は 798 となる。しかしこれは正確な数字ではない。綴には依嘱件数に含めることのできない内容の文書も入っているうえ、1 件の依嘱に関する往復書簡、電報、完成譜の控え、作曲料に関するやり取り等が必ずしも同一綴の 1 箇所綴に綴じ込まれているわけではないからである。同じ 1 件が、別の綴や同一綴の複数箇所に分散している場合など、照合がきわめて困難であり、実際に作曲が行われ完了したかどうか曖昧なものもあり、作曲の実数は上記の数字より減ずると見込まれる。

このように不明点の多い依嘱作曲であるが、本学では今なお校歌について各地の学校より資料照会や事実確認の問い合わせを受け、母校校歌に関する執筆のための資料収集、愛好家や研究者からの調査依頼が後を絶たない。照会されたことで、本学の記録以外にも東京音楽学校作曲の校歌があることが判明した例もある。資料を活用しやすく、依嘱作曲の全容を把握しやすくする必要に迫られている。

(2) 東京美術学校の依嘱製作は同校開校からほどなく始まった。第一号は国家的記念像となった皇居前の楠木正成銅像である。住友財閥の住友吉左衛門より明治 23 年に依嘱され同 33 年に完成した。明治 22 年に西郷隆盛が名誉回復すると西郷像の計画が持ち上がり、同 25 年に元薩摩藩士の軍人・権山資紀と同じく児玉利国の依嘱により製作された。当初は馬上の陸軍大将とする案だったが二転三転し、木彫で原型を彫り鑄造する手法で製作され、現在の姿に完成した。東京美術学校の初期の依嘱製作は時代を色濃く反映するとともに日本の伝統的な技術の応用により西洋に引けをとらないモニュメントを建造するという、明治美術人の覇気と美意識の体現となっている。大掛かりな製作品の例はシカゴ万博パビリオン「鳳凰殿」の設計と室内装飾、仙台昭忠銅標、浅草公園噴水器、掛川戦勝観音銅像、ホノルル鳳凰噴水塔など。

他にも刀剣、花瓶、杯など多岐にわたり、宮内省依嘱による献上品飾り棚、香炉など大衆の目に触れにくい工芸品までである。依嘱製作は東京美術学校が製作者集団として社会と関わった歴史そのものであり、学校経営にも教育研究にも益するところが大きかった。

戦時中の金属供出によって失われた製作品も少なくないが、依嘱製作自体は戦後まで続く。しかしその全容解明は幾重にも困難を伴う。理由の第一は明治 44 年以前の文書資料が同校の火事により失われたことである。したがって明治時代の依嘱製作を調査方法は、依頼元の文書資料を調査し、図案を収集し、現地調査により現物を 1 件ずつ撮影することである。大量に製作された徽章なども所持者を捜し出して収集しなければならない。

吉田千鶴子連携研究者が過去 35 年にわたり調査を重ねた結果、これまでに依嘱製作 466 件、製品の総数では 182,381 点の存在が明らかになったが、各々の詳細な解明には各地方に現存する製作品の現地調査、現物確認、撮影等を行う必要がある。

2. 研究の目的

本研究の最終目的は、東京音楽学校と東京美術学校の受託作の近代日本の芸術教育における意義と、両校の官立芸術専門学校としての独自性を解明することにある。そこで当面の目的は、その前提条件を整えるための音楽・美術それぞれの基礎調査に設定される。

(1) 依嘱作曲については、原資料の解読と再整理を基本とした全容把握に近づくため、基礎資料のデータ化と補完と原資料の劣化防止等を視野に入れ、以下を目的とする。① 本学の文書綴の再調査・再整理。② 依嘱作曲のデータベース構築。③ 既存のデータの入力。④ 追跡調査・現状調査による新情報の追加。⑤ 依嘱作曲の全データを検索可能にする。⑥ 文書綴全体のスキニング。⑦ 入力データと画像の照合を可能にする。

(2) 東京美術学校の依嘱製作の全容解明は、本学に文書資料の無い明治 44 年以前については、外部情報と新聞雑誌調査によって基礎資料を蓄積してきた。本研究では、依嘱 1 件ごとに異なる事情と資料のあり方に従って、現物調査、現状調査、依頼元の資料調査、世間に出回った小品については所持者の調査等、出張調査を中心に基礎資料を整えることを目的とする。依嘱 1 件ごとの時代背景、依嘱の経緯、製作方法、現物写真、図面収集し読み解くことにより、依嘱製作史の概要を明らかにすることが目的である。

3. 研究の方法

受託作の全容解明のために必要な研究方法の概要を述べれば、依嘱作曲と依嘱製作とはほぼ共通である。たとえば記録文書の調査、

受託の経緯や時代背景の調査、受託作の現状に関する追跡調査等である。しかし実際には音楽学部と美術学部とでは記録文書の保存状況も異なり、そもそも音楽と美術とでは依頼者の傾向、作品と社会との関わり方、作品の社会的影響、現状ともに異なるため、研究方法も自ずと異なってくる。

(1) 東京音楽学校の依頼作曲については明治から戦後まで、記録の残され方と整理のされ方は区々だが大きな欠損はなく文書資料が保存されている。このため原資料(=文書綴)の解明に重点を置き、今後の研究の端緒を拓くため、以下を行う。

- ① 依頼作曲のデータベース構築(データベースソフトにはFileMakerを使用)。
- ② 原資料の電子化。『百年史』以降の解説情報も反映した文書綴(往復書簡、楽譜草稿、歌詞、電報等)のデータ入力。
- ③ 文書綴全体のスキヤニング。
- ④ 依頼作曲の全データを検索可能にする。
- ⑤ 入力データと画像の照合を可能にする。
- ⑥ 追跡調査・現状調査から得られた追加情報の反映。まずインターネットにより作品情報と依頼元調査を行い、次にインターネット調査の難しい小学校・皇室関係・青年団等の地方組織についてジャンル別、年代別の調査リストを作成し、メールアドレスかFax番号の判明する小学校と教育委員会に照会した。
- ⑦ 「5. [その他]」(2)に後述する、音楽・美術合同で行う展示にあわせ、依頼作曲を実際に聴くことができるよう、本学音楽科学生と教員の協力を得て、明治から昭和までの7曲の復元演奏と録音を行った。またインターネット上で音源を公開している校歌4曲を各学校の許可を得て入手し、iPadで試聴できるようにした。データ入力、スキヤニング、インターネット調査、復元演奏のための楽譜作成、編曲、デジタルコンテンツ作成には、若手研究者と大学院生の協力を得て行った。

(2) 依頼制作については吉田連携研究者のこれまでの研究を基盤として、北海道から九州にわたる現地調査に重点を置く。依頼元に残る資料を閲覧し、現地での情報収集、現状調査、写真撮影により1件ずつ確認していった。おもな調査先と概要を受託順に記す。

- ① 鳳凰殿欄間(アメリカ合衆国[イリノイ州シカゴ市])[明治25年3月受託、同年10年完成]: 明治26年にシカゴで開催されたコロンブス世界博覧会関連の依頼。九鬼隆一が臨時博覧会事務局副総裁として陣頭指揮。パビリオンとしての鳳凰殿の内部装飾。
- ② 中尊寺金色堂内装飾髹漆修繕(岩手県)[明治30年受託、同31年完成] 中尊寺金色堂内を撮影するとともに、修繕等に関する文書綴の調査にあたった。
- ③ 仙台昭忠銅標(宮城県)[明治34年受託、35年完成]: 平成24年の調査では東日本大震

災により鶏が落下し大破した惨状を確認する結果となった。

- ④ 木彫聖観音原型(掛川戦勝観音銅像原型)(静岡県)[明治39年受託、同年完成(同40年開眼式)]: 日本海海戦勝利に沸き立っていた頃、後年文相となる岡田良平の依頼により、彫刻科教授竹内久一が黒岩倉吉を助手に製作した。天平彫刻に範を取って作られた原型は円満にして大らかな像姿で、温かみある美しさには定評がある。



掛川戦勝観音銅像(2011年撮影)

- ⑤ 松田源五郎銅像(長崎県)[長崎市長の依頼により明治39年受託、40年完成]: 松田は実業家・衆議院議員。製作担当者未詳。長崎市諏訪公園に建立されたが戦時中に供出され、フロックコート姿の原物は長崎市十八銀行社史料室所蔵写真にのみ残る。現在長崎公園にある胸像は、昭和38年に東京美術学校出身の富永直樹原型により再建されたもの。

- ⑥ 大阪図書館記文銅板(大阪府)[明治40年受託、完成]: 明治37年に住友吉左衛門友純の寄附により開館した大阪図書館本館中央ホール正面に取り付けられた大銅版で、住友家寄附の由来が刻まれる。铸造担当は铸金科教授の桜岡三四郎。

- ⑦ 隆国寺梵鐘(兵庫県)[明治42年受託]: 戦時中に供出され戦後になって本学が再び受託製作。

- ⑧ 山形仲藝銅像(宮城県)[大正8年受託]: 東北帝国大学の山形仲藝学長の退任記念に製作。昭和18年に供出され、戦後は礎石の上に遺像のレリーフを嵌め込んだ記念碑が建立されたので、当初の銅像は東北大学史料館所蔵の写真にのみ見ることができる。

- ⑨ 大円寺の鐘(兵庫県)[大正15年受託]:

音色が良く東京美術学校製作の銘もあり供出を免れた。

⑩小出房吉（札幌市）〔昭和2年4月5日受託、同月28日生産〕：小出は札幌農学校森林科が東北帝国大学農科大学となった明治40年に同大に赴任し、林学第1講座初代教授を務めた林学博士。同大教授の新島善直の依頼により、西洋画科助教授の田辺至が担当。写真4葉に基づき半身肖像2面を12号の額縁付きで、絵葉書650枚と合わせて仕上げる条件であった。北海道大学所蔵。

⑪大智禪師尊像（熊本県菊池市）鳳儀山聖護寺。熊本県知事の依頼により昭和18年に受託。関野聖雲が製作にあたるが、戦争激化により中断、19年のいわゆる美校騒動により関野は辞職、22年に急逝したが、その後の日展に出展された関野の絶作がこの禪師尊像であることがわかり、裏に昭和22年秋、聖雲の刻銘も確認された。

4. 研究成果

(1) 東京音楽学校と東京美術学校の受託作を調査した結果、それらはともに日本の近代国家建設に必要とされ、団体歌や製作品が近代社会および近代共同体に一定の役割を果たした点は共通であることがわかった。その一方で両校における受託の意味も、音楽と美術の受託作が社会に及ぼした影響のあり方も自ずと相異なることが明らかとなった。

当初、東京音楽学校は受託に必ずしも積極的ではなかった。担当教師が作曲した楽譜が依頼元に送られ、所定の作曲料が学校に支払われる。校歌はたとえ学校が廃校になっても同窓生に歌われ永く共有される。しかし教師一人が関わる音楽学校では、受託が教育研究に直接的な影響力を持つことはない。これに対し美術学校では、依頼製作は多額の製作費が学校に入る一大事業であり、設備の充実、教員の研究、学生の実地教育にも貢献した。製作品は戸外に置かれれば国民一般の目に触れ、共有物となる。風景の一部となり、名物となり、シンボルとなり、あるいは室内装飾として、あるいは工芸品として享受される。

(2) これまで受託作について両分野で調査されていたものの、情報共有は乏しかった。今回、全容把握の難しさを双方で再認識するとともに、正確な情報も少しずつ蓄積することができた。調査結果より、受託の時期、内容、時代背景等について各々の基礎資料を照合し検討するで、近代芸術教育における受託の意味を明らかにする基礎が整いつつある。

依頼作曲と依頼製作それぞれの調査の難所の違いも明らかになってきたが、それは美術作品と音楽作品の特性、生活や社会との関わり方の違いでもあることがわかった。

“作品が有る”とは、必ず具体的な物質的素材を伴う依頼製作の場合は、現物そのもの

が存在することを言う。破壊されれば写真か人の記憶には残るが、その威容、存在感、質感、空気感などは失われる。依頼作曲の場合、曲は物質として特定の場所を占めるのではなく、歌われることで生きる。楽譜も重要な拠となる。音楽と美術は一元的には比較し難しいが、共同体のシンボルとなる受託作が、見ること、持つこと、歌うことによって団体の一体感を醸成する点は両者に共通する。

(3) 依頼作曲に関する研究成果を以下記す。

① 曲種により調査方法も異なることが明らかになった。東京音楽学校の依頼作曲は、校歌を中心に各種団体歌がほとんどである。時代の推移とともに名称を変更した学校についてインターネット等で情報収集し、連絡先を特定した。この方法で情報を得にくかったのは、小学校、皇室関係、青年団などの地方組織である。このうち昭和3年までの依頼元の小学校38校中、メールアドレスの判明した19校、FAX番号の判明した16校と、残りは教育委員会に問い合わせ、14件の回答があった。台湾総督府や朝鮮総督府関係のうち調査先の目途の立ったものについては今後の調査につなげたい。

② 復元音源の作成。本学学生による復元演奏が大学美術館での展示において、原資料と連動して試聴できるコンテンツとなったことで、依頼作曲を歴史的な文書記録ではなくから生きた音源とすることができた。引き続き大学史料室にて試聴可能とし、大学のウェブサイトでの公開に向け準備中である。

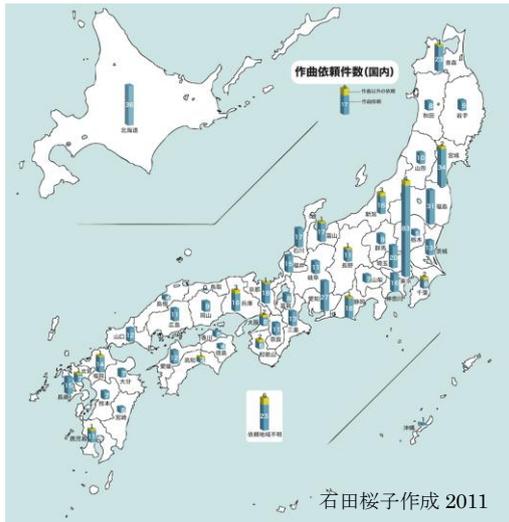
③ 曲の歴史的背景も明らかになってきた。復元演奏の中には戦時中に依頼された南方の部隊歌も含まれる。追跡調査の結果、作品が届けられた直後に部隊が解散したことが判明した。一度も歌われないまま楽譜は船と共に海底に沈み、今回の復元演奏が初演となった可能性が高いこともわかった。

④ 依頼作曲のデータ入力、画像スキャンを行い、全データの検索と画像との照合が可能になった。各綴の依頼1件を1としてID番号798件を数える。キーワード検索が可能になり、依頼作曲資料が活用しやすくなった。

⑤ 依頼が内地・外地を含むことは文書記録から把握していたが、今回、都道府県別および外地の依頼件数等が明らかとなった。次頁の図は内地都道府県ごとの作曲等依頼件数を示したものである。

外地からの依頼には、作曲以外の講師派遣、演奏・録音依頼など含め樺太7、満州14、中国（含内モンゴル19、韓国（含朝鮮）28、台湾7、ハワイ1であった。この概要は平成23年9月に大学史料室内の展示で一部公開した（「5. [その他]」(1)参照）。

(4) 依頼製作については計30件の出張調査を行い、資料収集、現状撮影を行うことができた。その成果は東京美術学校の依頼製作史



明治40～昭和24年東京音楽学校作曲等依頼件数(国内)

を明らかにする基礎資料となり、「稿本 東京美術学校依頼制作史」に仮製本14部にまとめられた。未だ情報不足の依頼制作もあり、残された情報収集は容易ではない。今後「東京美術学校依頼制作史」の刊行によって情報収集を呼びかけることも視野に入れたい。

(5) 依頼作曲の復元演奏は依頼作曲の実態を美術はじめ音楽以外の分野の研究者と情報共有するためにはぜひとも必要なものである。復元してみると、歌詞は時代を生々しく伝え、あるいは夢を歌い上げ、若い心に希望を持たせる。そしてどの曲も歌詞のメッセージを受け取り、歌詞のイメージを増幅する渾身の作である。復元演奏では古語調の歌詞や旧仮名遣いに苦戦したが、時代の隔たりを越えて現実の響きとして蘇った。録音音源は「5. [その他]」(2)に後述するように、大学美術館で公開され、美術史関係の学会例会でも概要紹介に活用された。25年度中に本学HPにて公開予定である。

受託作の研究は緒に就いたばかりであるが、今後は時代ごとの受託作の傾向、依頼元、テーマなど照合しすることで、近代日本の芸術教育における意義の検討に入りたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計12件)

- ① 橋本久美子：“乗杉嘉壽校長時代の東京音楽学校 昭和3年～20年 その建学の精神の具現化と社会教育論の実践 (4)” 東京藝術大学音楽学部紀要第38号、2013年3月、87～104頁 (査読有)
- ② 吉田千鶴子：“日本美術の保護 (後編)” 藝大通信第24号、2012年3月、26～27頁 (査読無)

- ③ 吉田千鶴子：“日本美術の保護 (前編)” 藝大通信第23号、2011年9月、26～27頁 (査読無)
- ④ 吉田千鶴子：“檔案・顕像・新視界” 陳澄波文物資料特展学術論壇論文集、2011年10月、13～25頁 (査読無)
- ⑤ 橋本久美子：“乗杉嘉壽校長時代の東京音楽学校 昭和3年～20年 その建学の精神の具現化と社会教育論の実践 (3) 東京藝術大学音楽学部紀要第38号、2011年3月、179～194頁 (査読有)
- ⑥ 橋本久美子：“東京音楽学校生の陸軍軍楽隊入隊 (後編)” 藝大通信第22号、2011年3月、26～27頁 (査読無)
- ⑦ 橋本久美子：“東京音楽学校生の陸軍軍楽隊入隊 (前編)” 藝大通信第21号、2010年9月、24～25頁 (査読無)
- ⑧ 大西純子：“正木直彦、チャールズ・ラング・フリーアー往復書簡 馬遠筆「江山勝覽」の写真複製本をめぐる” MUSEUM、東京国立博物館研究誌627号、2010年8月、53-70頁

〔学会発表〕(計7件)

- ① 吉田千鶴子：2012年10月6日 “漆芸軌跡と未来 (シンポジウム)” 東京藝術大学創立125年記念事業 (招待講演) 東京藝術大学
- ② 橋本久美子：“東京音楽学校 依頼作曲史概要” 2012年5月12日 明治美術学会 東京藝術大学
- ③ 吉田千鶴子：“東京美術学校 依頼制作史概要” 2012年5月12日 明治美術学会 東京藝術大学
- ④ 橋本久美子：“東京藝術大学音楽学部の132年” 世界音楽週 (招待講演)、2011年11月3日、中央音楽院 (北京)
- ⑤ 吉田千鶴子 “日本美術の保護 (基調講演)” 日本フェノロサ学会 (招待講演)、2011年9月17日、同志社大学
- ⑥ 吉田千鶴子 “中村勝治郎の業績” 中村勝治郎記念講演 (招待講演)、2011年5月1日、奈良県立美術館

〔図書〕(計3件)

- ① 津上智実・橋本久美子・大角欣矢、東京藝術大学出版会、ピアニスト小倉末子と東京音楽学校-海外が認めた日本人ピアニスト第一号、2011、(大角 vi～xiii、津上・橋本で2～137の各章を分担)
- ② 吉田千鶴子、吉川弘文館、〈日本美術〉の発見-岡倉天心が目指したもの、2011、209
- ③ 吉田千鶴子、勉誠出版、日中美術交流最盛期の様相 (滝本弘之編「民国期美術へのまなざし-辛亥革命百年の眺望」2011、32～40)

〔その他〕

(1)依嘱作曲に関する中間発表：平成23年9月2～4日の文化祭期間中、大学史史料室内の展示により依嘱の一覧表、内地・外地を含む都府県別依嘱件数など成果の一部を公開し、山田耕筰作曲の手書き楽譜も展示した。来場者は約300人であった。

<http://www.geidai.ac.jp/info/20110803.html>

(2)受託作の研究成果の一部を展示：平成24年4月5日～6月24日に東京藝術大学大学美術館にて大学所蔵品を紹介する「芸大コレクション展」の1コーナーで「特集陳列②藝大の創成期と依嘱事業」に出展した。展示内容は依嘱製作木型、文書資料、依嘱作曲の楽譜、依嘱元と東京音楽学校の往復文書、歌詞など。音楽側のモニター画面による依嘱作曲の概要紹介、iPadコンテンツによる依嘱作曲の復元演奏録音音源の再生など。コレクション展のみの入場者は6,127名、途中から同時開催された高橋由一展の入場者と合わせると（入場券は館内共通）80,233名であった。

http://www.geidai.ac.jp/museum/exhibit/2012/collection2012sp/collection2012sp_ja.htm

6. 研究組織

(1) 研究代表者

橋本 久美子 (HASHIMOTO KUMIKO)
東京藝術大学・総合芸術アーカイブセンター・特任助教
研究者番号：70401495

(2) 研究分担者

佐藤 道信 (SATO DOSHIN)
東京藝術大学・美術学部・教授
研究者番号：30154074
大角 欣矢 (OSUMI KINYA)
東京藝術大学・音楽学部・教授
研究者番号：90233113

(3) 連携研究者

古田 亮 (FURUTA RYO)
東京藝術大学・大学美術館・准教授
研究者番号：20259998
吉田 千鶴子 (YOSHIDA CHIZUKO)
東京藝術大学・総合芸術アーカイブセンター・特別研究員
研究者番号：30401483
大西 純子 (ONISHI JUNKO)
東京藝術大学・美術学部・非常勤講師
研究者番号：40401484